

井上ひさし エッセイ集 8

死ぬのが
こわくなく
なる薬
井上ひさし

堂

月十五日

柱

おや
おや
おや

おや
おや
おや



死ぬのがこわくなる薬

エッセイ集 Ⅷ

井上ひさし



中央公論社

死ぬのがこわくなる薬

エッセイ集 8

一九九三年二月一〇日初版印刷
一九九三年二月二〇日初版発行

著者 井上ひさし

発行者 嶋中鵬二

印刷 精興社
製本 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八-七

振替 東京二二三四

©一九九三 検印廃止

ISBN4-12-002273-0

目次

母君の遺し給ひし言葉

受難らしきもの

母君の遺し給ひし言葉

遅まきながら楽典を

少年詩人の勘定書

外国語

ある少女の二年間

別冊で思い出すこととなると

コトバの溶鉱炉

50 45 42 39 36 33 13 9

国語辞典の中の一生

53

新しい辞典の噂

55

現在望み得る最上かつ最良の文章上達法とは

59

ワープロは日本語を変えたか

63

死ぬのがこわくなる薬

85

病院渡り者

89

死ぬのがこわくなる薬

私のおきの話

92

きたない話

95

面会時間

99

私の名探偵―ブラウン神父

106

日常に革命的風穴をあけた品々の歴史―『モノ誕生「いまの生活」』

109

山形城―旅人だった山形の城主たち

112

「道場破り」をしながら旅をした遊歴算家―『和算家の旅日記』

126

好きな道―柳橋一丁目

129

*

府中市に足を向けて寝られない話

131

ある夏の思い出

134

野田秀樹の三大技法―『野獣降臨』

137

八重子さんの戦さ

142

三留理男さんのこと―『飢餓』

145

負け惜しみでいうのではない

プログラムへの執筆回避願状

吉川英治と私

理想の空間

島田歌穂十讃

講堂映画会の夜

イツモ静カニ笑ッテヤル

決定版までの二十年―『十一びきのネコ』

中村岩五郎に辿りつくまで

スミマセン

死ぬのがこわくなる薬

エッセイ集
8

母君の遺し給ひし言葉

受難らしきもの

受難と聞くとすぐ十字架を担うキリストを思い浮かべてしまうのは少年期にカトリック施設で育ったせいだろうか。わたしが育った世界で受難といえはキリストのそれに決まっております、自分の身の上に起こったつまらぬ災難を救世主の受難になぞらえるのはなんだか畏れ多い気がするが、それでも注文を受けたからは受難らしきものを見つけないといけない。

二十を一つ二つ出たばかりのころ、浅草の劇場で下っぱの文芸部員をしていた。朝の十一時から夜の九時まで動き回って月給は三千円だった。しかも月の十日は徹夜や半徹夜が続く。ところで三千円の月給は高いか安い。じつはこの仕事のすぐ後、四谷の出版社で、夜の八時から翌朝の八時まで守衛室でただ寝ていればいいというだけの留守番の仕事を見つけたがその月給が五千円、それと比べてみれば文芸部員の給料がいかに安いものだったかおおよそ知れようというものだ。仕事に不満はなかった。作者先生を安宿に缶詰にして戯曲を書いていただく。その戯曲をガリ

版に切つて台本をこしらえ同時によく読み込んで道具帳を出す。日中はキッカケが六十も七十もある舞台をつつがなく進行させ夜は踊りや芝居の稽古に立ち会う。どの仕事もおもしろかった。踊り子さんたちはどこまでも気がよく俳優たちには輝くような才能があり、そうした人たちがさらに上（たとえば有楽町の日劇ミュージックホール）を目指して励むのを眺めるのが愉快でないわけがない。いつのまにか「ここに自分の天職がある。ここに骨を埋めよう」と心が固まり始めた。

だが、月三千円では生きていけない。部屋代できれいに消えてしまう。どこかで食事代を稼がなければならぬが日に少なくとも十二時間は拘束されるからアルバイトができない。もとより解決策がないでもないのです、たとえばセミ・ヌード（へそは見せるが乳房はみせない）の給料は文芸部員の十倍以上である。看板のヌード（飾りをつけた乳房を見せて踊る）になると優に五十倍を超える。そういう踊り子たちに庇護されるのがもっとも手っ取り早い活計たくまの道だということ。は若い男ならだれでも思いつく。はつきり言えば、踊り子とねんごろになり食べさせてもらうのだ。たとえば彼女にすでに男がいて、彼から「おれの女に手を出すな」と殴られても、それでもヒモになれるなら構わないと考えたが、いったいに踊り子というのは面食いである。あるいは喧嘩の強い、それもその筋の男に弱いところがある。美男子にほど遠く腕っ節もない男にヒモの道は絵に描いた餅、水面の月、そこで活計をたてるには給料を上げてもらうしかないという当たり前の結論に辿たどり着いた。給料を上げられないなら、せめて徹夜手当は出ないものか。それにここに

腰を落ち着けるとなれば、まさかの時のために健康保険もほしいし、失業保険があればなおさらいい。こんなことをぼそぼそ言っているうちに照明係や楽団員から賛同者が現れ、みんなで会社側に頼んでみようということになった。

劇場がはねてから近くの喫茶店でこっそり相談しようと話がまとまったが、考えてみるとこれは組合を結成しようということと同じだと気がついて自分でも驚いた。そんな大それたことをするつもりはなかったからだ。

さて話はここから古典的なボタンで進行する。喫茶店に行ってみると、ボックスで待っていたのは同志ではなく一目でそれと分かるその筋のお人が三人というのもボタン。だれかが会社に密告したというのもボタン通り。

喫茶店のボックスで、「つまらねえ靴をはきやがって」、「ひどい顔しやがって。それでよく表を歩けるもんだ」、「眼鏡なんぞかけてインテリぶりやがって」などと言葉でさんざんたたかれた揚句、路地裏に連れ出され三人掛かりでいやというほど殴られ地面にボタン。また引きずり上げられて殴られた。それが何回か繰り返され最後に兄貴分らしいのが、

「明日から来なくていいとさ」

と言い、こちらの顔にペッと唾を吐きかけていなくなった。こうして劇場に骨を埋める夢は呆けなく消えたが、これが受難といえば受難だろうか。その後、脅迫状に埋め込まれた剃刀かみそりの刃で指を切ったり、門から硫酸の瓶を投げ込まれたり、何か月もつづけて深夜に怪電話がかかってき

たり、日本語もろくに使いこなせない批評家からわけのわからないことを言っ
て絡まれたり、いろいろと難儀なことはあったが、あまり気にはならなかった。や
はりこっちを殴ろうと考えている人間が目の前にいて本当に殴ってくるのが一番、
面倒である。

母君の遺し給ひし言葉

山形県の南部、もっと詳しくは、東に奥羽山脈、南に飯豊山地、そして北西に朝日連峰と四周をぐるり高い山々に囲まれた、冬むやみに雪深く、夏やたらに蒸暑く、そこでよく米の穫れる、直径五里ほどの盆地を置賜盆地おきたまといい、私は、この盆地の西の端、力士の締込みフンドシを干したときのように長々と伸びた人口六千の町の産である。

わが町を訪れた著名人は、私の知るところでは次の四人で、まず、明治十一年（一八七八）の夏、イギリス人の女流紀行作家イザベラ・バード（一八三二—一九〇四）が会津から飯豊山地を越えて町へきた。そのときの旅行記『日本奥地旅行』（二八八〇）によれば、彼女は町に入った途端、思わず、

「おお、ここそは東洋の牧歌的樂園……」

と賛嘆の声を漏らしたらしい。彼女のこの一言は、長い間——ただし米英を敵に回して戦われ

たあの戦争の期間中は別であるが——町の人びとの誇りの源になっていた。私もそれを聞いて子供心にも誇らかに思ったが、母は常にバードに異を唱えつづけた。

「夏の飯豊山地は蚊と蛎かきと蛇の天下なんだよ。そんなひどい所を越えてきてごらん。地獄だって楽園に思えるだろうから」

太平洋戦争直前の昭和一六年（一九四一）の九月には、中国問題を論じたら世界でも一番か二番に入るだろうといわれていた評論家の尾崎秀実はつみ（一九〇一—四四）が講演のために町を訪れた。前に町長をつとめたこともある読書家が町の好きたちと語らって講演会を実現させたのであるが、母もその好きたちの一員だった。戦後、尾崎秀実の、この時分の手帳が公けにされたが、九月二日の欄に次のような書き込みが見える。

「小松町。田五百町歩、畑百二十町歩。地主ノ多キ秘富ひふノ町」

戦中から戦後にかけて信じられないような食糧不足がつづいたが、私たちに、かて飯いしをたべた経験がない。親たちの丹精もさることながら、たしかにこれは尾崎秀実が見抜いたとおり、町が秘富（たとえば米と牛肉）の上に成り立っていたおかげにちがいない。

「死人が葉書を書くものか」